特集 授業を豊かにする教材の活用法

音声教材の活用

松沢伸二
（新潟大学）

本稿では，スピーカーやイヤホンなどから流れ，英語の指導と学習に用いる音源を「音声教材」とする。音声教材には，すでに教科書等に付属している既成の（ready-made）教材と，教師などが自ら作るあつらえの（custom-made）の教材がある。以下に，既成とあつらえの音声教材の活用例を紹介する。

1．語彙を習得する

語彙学習は外国語学習の基本中の基本だが，苦手にする中学生は少なくない。語彙には読んで意味がわかる reading vocabulary と，聞いて意味がわかる listening vocabulary がある。三省堂刊のワークブックには新しく音声 CD がついた。そこには CD で語彙の音声を聞き，その意味を日本語で選ぶ問題がある。この聴覚像と意味を融合する学習は，生徒が身につけるべき習慣の 1 つである。家庭学習にまかせず，ときおり授業中にも取り組ませたい。

音声教材には語彙などを学ぶために聞く（listen to learn）用途がある。*NEW CROWN* の GET の右頁の Listen と Let's Listen の音声スクリプトは，指導用 DVD-ROM 内にある。これを印刷して配布し，「表現の確認」等の学ぶために聞く活動で活用して，生徒の語彙習得を助けることもできる。

単語の綴りが覚えられない生徒集団には LVT が 1 つの手だてになる。LVT は Listening Vocabulary Test の頭字語である。教師は前時に学習した語彙から 10 語選び，付属 CD から音声を入手し，7 秒のポーズを置く形などにパソコンで編集して LVT を作る（前田（2006）を参照）。これを IC レコーダーに MP3 ファイルで保存し，CD プレーヤーの AUDIO 入力にケーブルで繋いで出力する。生徒は音声を聞き，その英語綴りと日本語訳の両方を解答用紙に書く。

LVT は教師が作るあつらえの音声教材だが，慣れれば 10 分ほどで作成できる。生徒はこのテストに向けて勉強すると，語彙の聴覚像・綴り・意味を融合できる。LVT 作成のポイントは，語句レベルの出題もすること，新出語彙に加えて既習語彙も出題すること，満点を取らせて達成感を持たせることである。毎回の成績は生徒の取り組み状況を示すので，LVT は英語学習全般の診断的評価にも活用できる。

2．ヒアリングの力をつける

英語の音声を正確に聞き分け，意味を捉える聞き取りを hearing，話し手の意図を推測し，自らの解釈を施す聞き取りを listening と区別することがある。ヒアリングは文レベルのインプットを解析する低次の聞き取り，リスニングは談話レベルの意味を統合する高次の聞き取りである。中学生にはヒアリングとリスニングの両面を養成する。

どの検定教科書にもヒアリング力をつけるコーナーがある。*NEW CROWN* では「Sounds 発音とつづり」と「Sounds 英語らしい音」がそれである。生徒は前者で英語の音素とそれを表す文字との関係を意識して単語などの音を聞き・発音する。後者では強勢，リズム，抑揚，連結，脱落などの視点から音声を聞き・発音して，英語の音への気づきを高める。

英語の聞き取りを苦手とする生徒にはこうした学習が必須である。最近は良いスピーカー音で再生でき，またパソコンに接続可能な IC レコーダーが廉価で市販されている。IC レコーダーをペアまたはグループに 1 つ準備し，指導用 CD から Sounds の音声を取り込んで，生徒が繰り返し聞いて気づきを話し合ったり，発音を録音してそれを聞き合ったりする能動的学習でヒアリングの力を伸ばすようにする。

3．リスニングの力をつける

松沢（2015）では，談話レベルで情報・要点・概要を聞くことを学ぶ（learn to listen）指導を提案した。そこでは *NEW CROWN* の Let's Listen の課題を学習タスク，定期考査の課題を評価タスク，評価に向けて練習する課題を練習タスクと呼び，生徒が練習タスクに十分に取り組んで，評価タスクの聞き取りに成功する体験を重ねる指導と評価を紹介した。

三省堂刊のワークブックに新しく加わった POINT, Talking Point, GET の本文の聞き取り問題で，生徒はリスニングの下位技能が鍛えられる。そのうえで教師が練習タスクをあつらえると，生徒にリスニングの力をつけられる。まず練習タスクのスクリプトを書き，次にそれを① ALT，②自分，③ソフトウェアが読むことで音源を得る。③の場合は，市販の音声合成ソフトウェアを使えば，複数の男女が日本語と英語で疲れ知らずにスクリプトを読んでくれるので，教室で実際に使える音声教材を手軽に作成できる。

4．発音を良くする

生徒は教科書の本文をうまく音読できると発音に自信を持つ。これがきっかけになって英語好きになることもある。上手に音読するには，個々の音に加えて，強勢，リズム，抑揚，連結，脱落などへの習熟が重要だ。これには上の「2. ヒアリングの力をつける」で述べた練習に繰り返し取り組ませる。

生徒の発音を良くする別の手だては音読テストである。教科書の数ページをテスト対象に指定し，よく練習させ，試験当日にくじ引きで順番・音読箇所を決めてパフォーマンス評価を行う。*NEW CROWN* には GET と Let's Talk の各ページの余白に音読のためのヒントが新しく示された。ここでもペアや班に 1 台の IC レコーダーに音源を準備して自由に使わせ，ヒントに注意して音声 CD の音を聞いたり，練習や録音をし合ったりするアクティブ・ラーニングをさせる。この音読テストに向けて生徒がよく練習すると発音が改善される（松沢，1986）。

5．スピーキングの力をつける

中学生のスピーキング力は PPP（Presentation, Practice, Production）でつけることができる。最初の P では 1 文レベル，次の P では数文や A-B-A-B の 2 ターンレベル，最後の P ではまとまりのある文章レベルの発話を目標にする。

NEW CROWN を使う授業では，GET の Point で最初の P，Practice で次の P，USE Speak・Project・Let's Talk の各ページで最後の P の練習をする。これらには指導用 CD の既成の音声教材を活用する。なお，USE Speak と Project の音源は生徒の発話の手本となるため，スクリプトを示して音声面の工夫などを確認して練習する。

PPP の指導では，最後の Production のタスクを生徒の興味や関心に応えるものに改作（adaptation）することが肝要だ。その際の学習タスク用の音源は，やはり ALT・自分・ソフトウェアのどれかの方法で，あつらえ音声教材として作成する。

中学生はペアでのロールプレイや個人やグループでの口頭発表には，事前に原稿を書いて準備する。このとき，教師や ALT が各生徒の原稿を読みあげ，IC レコーダーに録音して生徒に手渡すと，生徒はこのあつらえ音声教材を聞いてよく練習し，自信を持って発表できるようになる。教師がこのように一手間かけることで，PPP の最後の P の完成度が高まり，結果として生徒の話す力が伸びることになる。

今後もハードとソフトの革新が進み，音声教材は一層身近なものになる。図書室やコンピュータ室を整備して，生徒が既成の音声教材をもっと自由に豊かに聞ける環境を整えたい。そこには教科書教材に加えて，楽しみのために聞く（listen for pleasure）体験を与える英語の歌，名作の朗読，英語学習者向けサイトからの音源なども用意したい。こうした自学システム，それに生徒個人持ちの IC レコーダー内に自作・教師作のあつらえ音声教材があれば，多くの生徒が主体的・自律的に英語を学び出すだろう。

【引用文献】
前田啓朗（2006）「音声をパソコンで編集する」『英語教育』（大修館書店）5 月号，pp. 35-37.
松沢伸二（2015）「Let's Listen での指導と評価」『TEACHING ENGLISH NOW』特別増刊号，Vol. 1, pp. 8-9.
松沢伸二（1986）「音読テストを用いた発音の評価の方法」『学力評価の方法』開隆堂出版，pp. 223-228.